

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16664

研究課題名（和文）ガンディー主義の100年 インド・ウッタラーカンドにおける草の根レベルの展開

研究課題名（英文）The hundred years of Gandhian grassroots movement in Uttarakhand, India

研究代表者

石坂 晋哉 (Ishizaka, Shinya)

愛媛大学・法文学部・准教授

研究者番号：20525068

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：インド・ウッタラーカンド地方のガンディー主義者組織は、1990年代の低迷期を経て、立て直しが図られ、2010年代にはいくつかの新たな動きがみられた。ガンディー主義の活動家が運営する学校や学生寮は、かつての教え子が指導者になったり、自身の子どもを同じ学校や学生寮に入れたりといった形で世代交代が重ねられ、地域に深く根付いてきている。また、シコクビエやアワ、ヒエ、豆類等を中心とした多様な在来種の保存・活用に取り組み、持続可能な農業を模索してきたガンディー主義の活動家たちの農業のあり方が、注目を集めている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会運動のインパクトについて、人びとの意識や暮らしというミクロなレベルから長期的スパンに立ち明らかにすることを目指したものである。そうした社会運動研究としての意義に加え、本研究ではガンディー主義者たちの取り組みを追うことにより、インドの地域社会が現在直面する課題が浮き彫りになった。それは、丘陵部（農村部）と平坦部（都市部）の格差の拡大、「異常」気象と災害の頻発、農業担い手の減少など、日本の地方が直面する課題とも通底するものであった。僻地での教育や農業へのガンディー主義者の長年の取り組みから学ぶべきことも多い。

研究成果の概要（英文）：The Gandhian activists in the Uttarakhand region of India have tried to revive the Gandhian organization after its stagnation period after the 1990s, and there have been some signs of reactivation in the 2010s. Schools and dormitories run by Gandhian activists have been deeply rooted in the community due to generational changes such as former students becoming leaders or sending their children to the same school or dormitory. The Gandhian activists' initiatives for the conservation and utilization of various indigenous species of traditional millets and beans have attracted attention as a model for sustainable agriculture.

研究分野：地域研究

キーワード：南アジア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

2015 年は M. K. ガンディーが南アフリカからインドに帰国して 100 年目にあたり、インド内外であらためてガンディーに注目が集まっていた。この 100 年間、ガンディーの思想や実践は、インド社会にいかなるインパクトをもたらしたか。従来の研究では、ガンディーの思想や実践を継承する「ガンディー主義者」とその全国組織の盛衰の分析がなされてきた。1948 年のガンディー没後、しばらくは強固であり続けたガンディー主義者の全国組織は、1970 年代半ばに内部分裂により弱体化したが、その後も各地のガンディー主義者たちは、それぞれ地域社会において社会改革のための諸活動に取り組み、さまざまな社会運動に関わってきた。本研究では、そうした社会運動やさまざまな活動が、人びとにいかなるインパクトをもたらしてきたかについて、複雑系的な相互作用による累積という視座・枠組から捉えることを目指した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、インドにおけるガンディー主義の影響を、ウッタラーカンド(2000 年に新設された州)というひとつの地域に絞り、また 100 年間というタイムスパンの中で、そこでの全体的輪郭とミクロな実態とを明らかにすることであった。具体的には、ガンディー主義者組織のウッタラーカンド支部レベルの盛衰について、ガンディー主義の活動家やガンディー主義の学生寮や博物館の関係者へのインタビューから明らかにするとともに、ウッタラーカンドの人びとの意識や暮らしのレベルでどのような形でガンディー主義の精神が息づいているかを探った。

### 3. 研究の方法

(1) 2016(平成 28)年 9 月に現地調査(インド・ウッタラーカンド州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。ガンディー主義者が設立した学生寮であるタッカルバーパー寮の元・寮長である S・パフグナー、R・ガイローラ、現・寮長の K・S・サジュワーンにインタビューを行うとともに、関係者を紹介していただいた。また、ガンディー主義者組織(サルヴォーダヤ協会)ウッタラーカンド支部の歴史と現状について、D・S・ネーギーにインタビューを行うとともに、関係者を紹介していただいた。さらに、英語およびヒンディー語の関連資料を収集した。

(2) 2017(平成 29)年 8~9 月に現地調査(インド・マディヤ・プラデーシュ州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。ガンディー主義運動の歴史と現状について、ガンディー主義関連の博物館の運営に携わる N・ターイタスらにインタビューを行った。英語の関連資料を収集した。

(3) 2017(平成 29)年 10~11 月に現地調査(インド・マハーラーシュトラ州およびグジャラート州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。ガンディー主義運動の歴史と現状について、ガンディー主義の活動家 S・ジョセフや A・サーヴェーらにインタビューを行った。英語およびヒンディー語の関連資料を収集した。

(4) 2018(平成 30)年 2~3 月に現地調査(インド・ハリヤーナー州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。ガンディー主義運動の歴史と現状について、ガンディー主義の活動家 N・ヴォーラーと R・ヴォーラーにインタビューを行った。英語の関連資料を収集した。

(5) 2018(平成 30)年 9 月に現地調査(インド・ハリヤーナー州)を実施し、関係者へのインタビューを行った。ガンディー主義運動の歴史と現状について、R・ヴォーラーにインタビューを行った。

(6) 2019(平成 31)年 1 月に現地調査(インド・デリーおよびマニプル州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。英語の関連資料を収集した。

(7) 2019(令和元)年 8~9 月に現地調査(インド・ウッタラーカンド州およびハリヤーナー州)を実施し、関係者へのインタビューと資料収集を行った。ガンディー主義者組織(サルヴォーダヤ協会)ウッタラーカンド支部の歴史と現状および、ウッタラーカンドの社会・生活・環境・農業の変容について、ガンディー主義の活動家である V・パフグナー、S・パフグナー、D・S・ネーギー、V・ジャルダリー、K・S・サジュワーン、S・S・サジュワーン、B・サジュワーン、M・S・ネーギー、T・ギルディヤル、B・パーイー、R・ガイローラ、B・ネーギー、R・ヴォーラーらを中心に、インタビューを行った。英語およびヒンディー語の関連資料を収集した。

### 4. 研究成果

(1) ガンディー主義者組織(サルヴォーダヤ協会)ウッタラーカンド支部は、S・ベーンやM・ベーンらガンディー主義者第一世代が活躍した1950~70年代から、S・パフグナーら第二世代が活躍した1970~90年代にかけて、特に1960~80年代の不可触民制廃絶運動、禁酒運動、女性地位向上運動、環境運動などの盛り上がりとともに活発な活動がみられたが、その後組織的には低迷した。しかし、D・S・ネーギーやB・バーイー、S・S・サジュワーン、B・ネーギーら第三世代が、組織的立て直しを図り、2010年代にはいくつかの新たな動きが生まれつつあることが明らかになった。第1に、近年の「異常」気象により頻発する災害に対し、レジリエントな(回復能力の高い)社会・環境をつくっていかうとする新たな取り組みがなされている。第2に、2000年代から急激に進行しつつあるウッタラーカンド州内の丘陵部(農村部)と平坦部(都市部)の格差拡大に対し、農業と教育の振興を通じて丘陵部の社会の底上げを図ろうとするガンディー主義の取り組みが、新たな注目を集めつつある。第3に、従来のガンディー主義者の活動はウッタラーカンドの丘陵部が中心であったが、平坦部(都市部)におけるガンディー主義組織の活動に、若い世代が参加し始めている。これらの動向を、今後も注視していく必要がある。

(2) ガンディー主義の思想や実践の「継承」という問題、つまり教育面では、ガンディー主義の活動家が運営する学校や学生寮の歴史がすでに半世紀を越え、第一世代の指導者に育てられた教え子が指導者(教員や寮長など)になり、2000年頃からは、さらにその教え子が指導者を務めるような形になってきている。卒業生は、社会活動家のみならず、政治家や役人、実業家など、各界で活躍している。そのような目立った活躍をしていない卒業生であっても、自身の子どもを同じ学校や学生寮に入れている者も多く、ガンディー主義の学校や学生寮が地域に深く根付いていることが明らかとなった。ただし、学校や学生寮の運営にあたり、財政面での課題は大きい。

(3) ウッタラーカンド地方のガンディー主義者の活動がとりわけ華々しくみられたのは、1970~90年代の環境運動との関連においてであった。環境保護および農業振興の面では、現在もガンディー主義の活動家が活発な展開をみせている。ガンディー主義者は、いわゆる緑の革命の品種改良の技術に対し、その弊害(多様な在来種の消失等)に警鐘を鳴らしてきたが、そもそも非灌漑地が大半を占めるウッタラーカンド丘陵部に緑の革命の技術をそのまま適用することは困難でもある。2010年代には、一方で、ウッタラーカンドにも遺伝子組換え作物が入ってくるとともに、他方では、州政府が有機農業・自然農法を称揚するという複雑な展開がみられる。しかし、もっとも深刻なのは、「異常」気象と頻発する災害、イノシシやサルなどの獣害、そして農業の担い手の減少である。そうしたなかで、長年に渡ってシコクビエやアワ、ヒエやさまざまな豆類を中心とした多様な在来種の保存・活用に取り組み、持続可能な農業を模索してきたガンディー主義の活動家たちの農業のあり方が注目を集めていることが明らかとなった。また、多くのガンディー主義者が活躍した1970~80年代の森林保護運動後に「復活」した森林が、活動家や村人たちの不断の努力により、農業と暮らしの支えになっている地区がウッタラーカンド地方各地に点在していることも明らかとなった。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計36件（うち招待講演 9件 / うち国際学会 9件）

1 . 発表者名 Shinya Ishizaka
2 . 発表標題 Glocal Development of Natural Farming Movement
3 . 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Shinya Ishizaka
2 . 発表標題 Social Movements and Social Transformation in Uttarakhand
3 . 学会等名 International Seminar on Assessing Citizen Participation and Voices in the Era of Democratic Decentralisation in Indian States: Interdisciplinary Approaches ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Shinya Ishizaka
2 . 発表標題 Glocalization of Natural Farming
3 . 学会等名 International Seminar on Rethinking Development: Networks, Brokers and Devotion ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Shinya Ishizaka
2 . 発表標題 Beliefs and Movement: On the Misapprehensions of "Hindu" Elements in the Anti-Tehri Dam Movement
3 . 学会等名 International Convention of Asia Scholars 10 ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1. 発表者名 石坂晋哉
2. 発表標題 ヒマラヤ山麓の今を生きる人びと
3. 学会等名 大学連携市民講座（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石坂晋哉
2. 発表標題 自然農法運動のグローバルな展開
3. 学会等名 中四国法政学会第58回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石坂晋哉
2. 発表標題 ガンディーのインド
3. 学会等名 放送県民大学（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shinya Ishizaka
2. 発表標題 Natural Farming Movement
3. 学会等名 Sevagram International Conference on Non-violent Economy and Peaceful World（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石坂晋哉
2. 発表標題 環境運動はいかに生まれ何を変えたか チブコー（森林保護）運動を事例として
3. 学会等名 第25回京都大学地球環境フォーラム「交差する環境 変容するインド社会における人と自然」（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ISHIZAKA, Shinya
2. 発表標題 "The Right to Know Is the Right to Live": The Right to Information Movement in India
3. 学会等名 3rd ISA Forum of Sociology (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Tatsuya YAMAMOTO, Tomoaki UEDA, Kazuhiro ITAKURA, Kenta FUNAHASHI, Shinya ISHIZAKA, Makiko KIMURA, Maya SUZUKI, Kodai KONISHI	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Palgrave Macmillan	5. 総ページ数 222
3. 書名 Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights	

1. 著者名 インド文化事典編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 770
3. 書名 インド文化事典	

1. 著者名 石坂晋哉、佐々木真	4. 発行年 2018年
2. 出版社 愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」	5. 総ページ数 28
3. 書名 Natural Farming Today 1	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>TEHRI COLLECTION  <a href="http://kindas.fieldcollections.org/index.php">http://kindas.fieldcollections.org/index.php</a></p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----